

思ひ草

第40号

令和5(2023)年1月27日 発行

人工知能は先生の夢を見るか？

初等教育学科教授 さかもと まさのり
坂本 正徳



「情報科学入門」という一般教養の授業の中で、「コンピュータやロボットに任せておけないと思うことは？」という問いを出しました。その回答結果は多岐にわたるものでしたが、「教育」と書かれたものが少なからずありました。大学の授業としてはSFがすぎるかな、という問いかけではありましたが、理由もしっかりと書いてありました。心や感情のある人間を教育することは難しい、知識を身に付けさせることはできるだろうが教育はそれだけではない、小さい子どもは人間でないで育てることができない、「人間を育てる」ということは正解のない問題に取り組んでいる、など。

現在、さまざまな仕事に人工知能やロボットの導入が進んでいます。人工知能の発展は予測できないので、将来、勉強を教える先生の仕事も担うかもしれません。それでもなお、教育は人間がすべきという意見を出してくれたことは人間開発学部の教員としては頼もしい限りです。

SF映画では、効率よく教育するプログラムが開発され、コンピュータ相手に学習する場面が見られます。最近の学校へのICT機器の導入の現場を見ると、その場面が想起されます。2020年以降、学校現場ではGIGAスクール構想とコロナ禍でのデジタルデバイスの必要性によって、ICT機器の普及が急速に展開されています。しかし、ICT機器が使えればそれでいいというわけではありません。ICT機器は効率よく学習活動を進めるための教材の一つとして利用され始めたばかりです。

人間開発学部を卒業していく学生の多くは先生という職業に就いて教育に携わっています。学生がこれまで手にしていた学部ガイドブックの表紙にはキャッチコピーとして「ヒトを育てる人になる」や「人を支えるプロになろう！」が書かれてあります。ICT機器が普及してきたこの時期だからこそ、この言葉の意味を考え、将来の夢に進んでもらいたいものです。

教職員の同僚性と子どもの育ち

子ども支援学科准教授 やぎゅう たかし
柳生 崇志



教職を目指す学生や現職教員の皆様は、これまでの学びや実践の中で同僚性という言葉を目にしたことがあると思います。同僚性とは、教職員間で支え合い協働する力のことであり、とくに教育・保育の現場においてはその学校や施設の機能を存分に発揮するために最も重視されることのひとつです。

先日、ある認定こども園を視察した時のことです。

その園では70名以上の教職員が働いていました。保育教諭、栄養士、事務員等がみな生き活きと仕事に励み、子どもたちと常に楽しそうに関わっている姿は感動を覚えるほどでした。そこで、理事長兼園長先生に園の職場環境や同僚性を高めるために大切にしていることを訊ねたところ、「一人一人の職員を信じ、大切にすること」と明快に答えてくださりました。直後に、同園の主幹保育教諭と話す機会を得て職場環境についていろいろ聞いてみると、教職員間の信頼関係に裏付けられた強く確かなアサーティブネス(アサーション)が園全体に満ちていることがわかりま

した。アサーティブネスとは、自他尊重の態度やコミュニケーションのことで、お互いが程よく自己主張をしながら相手の考えや行動を尊重することにより、当事者間の関係性やその成員が含まれる集団の社会性の質向上が期待されます。幼児教育・保育における社会性の質向上は、その園で実践される幼児教育・保育の質向上そのものと言ってよいでしょう。果たせるかな、この園は全国からの視察者が後を絶たないほどに素晴らしい教育・保育実践に満ち溢れており、何より、職員間の良好な関係性の中で育つ子どもたちもまた実ののびのびと自己主張をはっきりと表現しながらお友だちの意見を尊重できている姿がこちらこちらでみられました。

同僚性を考える時、教職員の能力や個性をいかに上手く生かす組織であるべきかがしばしば議論されますが、その大前提としての信頼関係の構築に今一度、心を寄せてみてはいかがでしょうか。

教育実習

子どもたちの学ぶ意欲を引き出したい

健康体育学科教授 おおや りゅうじ
大矢 隆二



「子どもたちの学ぶ意欲を引き出したい」—教育実習が近づくと、この思いはますます高まってくるのではないのでしょうか。対話的でワクワク、ドキドキ、ナルホドがある授業…。なかなか難易度が高いですが、目指したい学びのデザインです。

私の担当授業は教職に関わる授業が多いです。それゆえ、教職を希望する多くの学生が受講し学びを深めています。しかし一方で「この授業は必要とされていると思いをしているのかも…」という不安になることがあります。ではこの不安とどう向き合うべきか。結論からいうと「必要とされているか」に気を揉むのではなく、「学生の学びにつながっているか」を第一義に考えるようにしています。

教育実習でも子どもたちを夢中にさせたり、意欲を引き出したりする場面がありますね。まずは、何のためのこの授業があるのかを捉え、子どもたちの学びを深めるために一生懸命に教材研究することです。加えて、普段から良い人間関係を築くために、明るく表情豊かに積極的に関わることも必要です。そのうえで、問いかけながら学びをよく観察し、指導案を作成することができる。ポイントは、何をどのように学ばせるのか、うまくいかなかった場合はどうするのかなど、毎日振り返りながら不足点を改善していくことです。教育実習ではこのような省察と改善が繰り返し行われます。

教師は「指導者」です。子どもたちとの馴れ合いの関係に気を付け、けじめを保ち、実習生の学ぼうとする前向きな姿勢が大切です。教育実習ではその姿勢を忘れないことです。森信三は『修身教授録』(1989,致知出版社)のなかで「教師自身が常に自ら求め学びつつあるでなければ、真に教えることはできない」と述べています。教育実習は、教職に向かう大きな一歩になります。準備に時間をかけ、授業の省察と改善を試みる。こうしたことをコツコツできれば、子どもたちの学ぶ意欲を引き出し、その成果も確実に保証されることでしょう。

教育実習を終えて

健康体育学科 3年 まつざき だいすけ
松崎 大育

私は母校である都内の中学校で3週間教育実習をさせていただきました。実習に行く前は、不安でしたが、実習を通して多くのことを学び吸収するという積極的な姿勢を大切にしようと決意し、実習に臨みました。そして、実際に実習を行ってみて様々なことを学びました。

1つ目は、自分らしさを大切にすることです。この実習で指導教官の先生に「教え方は十人十色、授業に正解はない」という言葉をよくかけていただきました。授業に正解がないからこそ授業で生徒たちに伝えたいことを明確にし、自信をもって授業を行うことの大切さを学びました。

2つ目は、生徒一人一人を尊重するということです。私の実習校にはダウン症の生徒、性同一性障害の生徒、多動症の生徒など障害を持っていないが通常学級で他の生徒と同じように授業を受けている生徒が何人かいました。現場の先生方はその子らの特性を個性として捉え、平等に接していたのが非常に勉強になりました。また、実習期間には合唱祭が行われましたが、その期間、障害をもっている生徒に対し他の生徒たちが助け合いながらクラスで一つの合唱を作り上げようとしている姿が非常に印象的でした。

3つ目は、教師は非常にやりがいのある仕事であるということです。大学の授業等を受ける中で教師のやりがいの大きさを学んでいたつもりでしたが、実際に現場で体験すると日々変化、成長していく生徒たちの姿を見て教員になりたいという気持ちがより一層高まりました。

他にも3週間、非常に多くのことを学び、体験することができました。生徒たちのことをよく理解し、何よりも生徒のことを一番に考えている先生方の姿を見て、教師という仕事の大変さや面白さ、責任の重大さを感じました。そして、教育実習を通して「先生になりたい」という希望から「絶対に先生になる」という決意に変えることができました。いつも笑顔で、情熱をもって、この実習で得たものを活かして立派な教師になれるよう精進していきたいと思えます。

教師塾

東京教師養成塾での学び (東京教師養成塾より)

初等教育学科 4年 ^{ひろせ いちえ} 廣瀬 市画

東京教師養成塾では、教科等指導力養成講座を受け、特別教育実習を行いました。講座では、教師としての使命感や服務、教育課題、学級経営、教科等に関することを学びました。児童と長い時間関わるので、その分影響力も大きいと感じ、児童の見本となる言動を心掛けようと思いました。また、特に授業や学級経営において、主人公は児童であり、児童一人一人の目線に立って考えることが大切だと学びました。

特別教育実習では、講座の学びを生かして、多角的な児童理解に努めました。授業中や休み時間、給食や掃除の時間など、様々な側面から児童を観察するとともに、全員と会話するようにしました。夏休み前最後の実習では、話しかけてもうなずくだけだった児童が、「先生、さようなら。」と言って私にハイタッチをして帰りました。喜びを噛みしめるとともに、一人一人と粘り強く関わることの大切さを実感しました。養成塾の教授や同期の仲間たち、指定校の先生方や子供たちから学んだことをずっと大切にしていきます。

新たな仲間との出会いと学び合い (かながわティーチャーズカレッジより)

初等教育学科 4年 ^{かわさき あいこ} 川崎 藍子

大学3年生の8月からかながわティーチャーズカレッジのチャレンジコースに参加しました。

ティーチャーズカレッジでは、8カ月の間に教師としての心構えや授業づくり、社会人としてのマナーなど教育学講座や実践力向上講座といった様々な講座を通して学ぶことができます。新しい仲間とグループワークを通して意見を交換したことで、自分にはなかった考え方を知り、視野を広げることができました。特に実践力向上講座では、初めての学校で行事の補助を行いました。ボランティア先の学校とは違う取り組み・雰囲気を感じ、新たな発見が多くありました。

また、同じ志や夢をもつ仲間と出会い、多くのつながりが生まれるという点も魅力の一つです。閉講式後も連絡を取り合ったり、教員採用試験前には一緒に対策をしたり、試験当日も顔見知りがあったことで安心することができました。

かながわティーチャーズカレッジで得たつながりや経験を大切に、これからも学び続けていきたいと思っています。

今日の失敗は明日の成長 (埼玉教員養成セミナーより)

初等教育学科 4年 ^{よこやま かつひろ} 横山 勝大

「教員になるために多くの経験や力をつけたい」という思いから、私は埼玉教員養成セミナーを受講しました。学校体験実習や講義・講演・演習を通して私は多くの学びを得ることができました。講義・講演・演習では、各分野の先生方から、指導法や学級経営、教師としての心構えなどについて学んできました。また、その学びを知識としてとどめるのではなく、学校体験実習で実践しより学びを深めてきました。学校体験実習では9か月という長い期間、教師の仕事を行い、力をつけてきました。その過程で私は、授業づくり、机間指導、話し方、児童対応など多くの場面で失敗を経験しました。しかし、その失敗があったから今の私があります。失敗を通して修正しもう一度挑戦することを繰り返して、教師としての力をつけてきました。

埼玉教員養成セミナーで、経験することの大切さを痛感しました。これからも、ボランティア等で学校現場の様子を自分の目で見て、教壇に立ったときをイメージしながら常に学ぶ姿勢を忘れず、教師としての土台を築いていきたいと思っています。

同じ志をもつ仲間との出会い (よこはま教師塾アイ・カレッジより)

健康体育学科 4年 ^{みやざわ かい} 宮沢 快

私は、大学の仲間との学びや教育ボランティアを通して小学校の教師になりたいという思いが強くなったため、「よこはま教師塾アイ・カレッジ」に入塾しました。入塾した大学3年生の9月から3月までの卒塾の間さまざまなことを学ぶことができました。その中で最も自分自身が入塾して良かったと思うことは、「同じ志をもつ仲間と出会えたこと」だと考えています。

最初の「ベーシック講座」では、小学校、中学校関係なく横浜市の教師を志す人が10人程度のグループに分かれて共に学びました。次の「スタンダード講座」では小学校、中学校の各教科に分かれて学びを深めていきました。どちらの講座においても同じ志をもつ仲間と出会い、授業を構想したり、ディスカッションし考えを高め合ったりした時間は自分の財産になっています。

4月から教師として働くときには、困難な状況によって多くの悩み事が生まれるかもしれません。そのようなときは多くの心強い同じ志をもつ仲間がいることを思い出し、困難に立ち向かって成長していく、そのような教師になりたいです。

ボランティア

何物にも代え難い宝物と感謝を胸に

初等教育学科 3年 **梅津 敬介** うめつ けいすけ

私は教育ボランティアとして、地域行事や横浜市内の小学校3校の宿泊体験学習に参加させていただいた。大学での学びを踏まえた試行錯誤を繰り返しながら、大学では実感を持って学べなかった学校と地域の繋がりや学校の外での活動について身を以て学び、教師や子供への理解をより深めたり、知識や考え方の幅を広げたりすることができた。そこで得た経験や知恵は勿論のこと、特に、初めての宿泊行事という子供にとって思い出に深く刻まれて、大きく成長する瞬間に立ち会えた喜びは、何物にも代え難い。

大学や日常の学校現場を飛び出した新しい景色を観たことで得られた学びと芽生えた感情は、私の将来に必ず生きると確信している。ぜひ、多くの教職を目指す同志にこれを体感して、自分の将来に繋げてほしいと思っている。

大学入学後の3年間はコロナ禍にあり、恵まれなかったことは多々あった。しかし、コロナ禍だからこそ得られた経験や学び、人との繋がりがある。それは私の何物にも代え難い宝物だ。私に宝物を与えてくださったたくさんの方々への感謝を胸に精進し、私が思い描く未来を迎えたい。

実践を通した学び

子ども支援学科 4年 **迫屋 琴弓** さこや ことみ

私は、大学3年生の2月から港区の幼稚園に週1日ボランティアに行っています。基本的には、支援が必要な子どもの援助を行っています。

私はボランティアを通して、教員採用試験の小論文や模擬保育を考える中で、子どもの実際の姿を見ることができると問題に出てきた子どもの姿を具体的にイメージできるようになりました。それにより、発達に合わせてどのような援助や活動を行ったら良いかを考えやすくなりました。さらに、具体的な言葉掛けは、先生の援助を近くで学ぶことができるので、実際の援助を思い出しながら考えていました。また、先生の援助の方法を学ぶことは、私自身の子どもへの関わり方や言葉掛けのバリエーションを増やすことができ、これから働く上でも大切な経験を積ませていただいています。

実習を経て、改めて現場で学ぶことで、将来どのような先生になりたいのか、どのように子どもと関わってどのようなクラスを作っていきたいのかということを考えるようになりました。これから、幼稚園で実際に働く中でボランティアの経験を生かしていきたいです。

ボランティアで地域と繋がる

子ども支援学科 2年 **加藤 優実** かとう ゆみ

「横浜市たまプラーザ地域ケアプラザ」での活動状況

横浜市たまプラーザ地域ケアプラザは、身近な福祉・保健の拠点としてさまざまな取組を行っている「地域ケアプラザ」という横浜市独自の施設の1つです。青葉区内に12箇所ある中で、ここは駅舎から直結した建物にあり、とても利便性の高い福祉と子育て支援の拠点です。2021年のクリスマス・コンサートを皮切りに、この1年間にのべ50名以上の学生が「親子遊び場～スマイル♡ファミリー」や「健康ボイストレーニング講座」など数多くの企画にボランティアとして参加したり、「ミュージックキャラバン 秋のコンサート」を開催させていただいたりしました。またタウンミーティング「地域の子育て支援の実情と意見交換会」には教員が参加し、子育て支援関係者と交流することができました。まさに地域と大学が共に学生を育て、地域の子育てについて考える機会を提供していただきました。

たまプラーザ駅に隣接する横浜市地域ケアプラザにて様々なボランティアに参加してきました。昨年度の「親子のためのクリスマスコンサート」で前日の設営と当日のスタッフとして初めてボランティアに参加しました。昨年に続き今年も参加し、音楽大学出身の音楽隊の皆さんが演奏をしている中、親子の側で音楽に合わせて手拍子をして盛り上げました。年齢ごとに2部に分けて公演があり、乳児は保護者と触れ合いながら、幼児は一緒に踊りながら、のように年齢によって音楽の楽しみ方や関心が異なることがわかりました。「親子でリトミック」ではリトミックの先生と一緒に乳幼児と触れ合いながら音楽に合わせて体を動かしたり簡単な楽器での演奏を楽しんだりしました。クリスマスコンサートや親子リトミックでは地域の親子が参加することから、近い年齢の子どものいる保護者同士の交流の場になっています。このようなボランティアを通して実際に親子と触れ合う貴重な体験をさせて頂きました。横浜市地域ケアプラザでは、毎月多くのイベントがありますので気になった方はぜひ参加してみてください。